

(様式 3-2) ※実施要領を熟読の上、作成(A3 横使い)してください。

特定テーマに対する技術提案 (※下枠の寸法は変えないでください。)

1 町中心部の賑わいや交流を創出する施設 複数の「ひろば」が「ひと」と「まち」をつなぐ

■ 町の中心部としての建ち方

・既存建物を活用し「まちのひろば」が豊かな関係性を生む配置
県道、町道から入り込んだ敷地の特性を活かし、ほどよい囲われた感のある「まちのひろば」を敷地全体でつくります。囲われた印象からくる安心感と心地よさを感じる敷地全体が「芝生ひろば」「すこたまひろば」「大屋根ひろば」で視覚的につながることで、立体的な広がりのある「ひろば」ができあがり、「ひと」と「まち」の結節点をつくりだします。

■ にぎわいの拠点となるために

・奥まった敷地に引き込む複数の「ひろば」
県道側から敷地を見ると起伏のある「芝生ひろば」と丸窓の特長的なファサードが目に入ります。引き込まれるように進むと、「すこたまひろば」の様子が伺える大きな開口と大階段のある「大屋根ひろば」が出迎えます。県道からの視線の抜けを重視し、これまで以上に多くの方に訪れてもらえる施設を目指します。

・「すこたまひろば」で育む、学びと交流の場

「すこたま(=すこごとくさん)ひろば」は全体が図書室となった、多層のフリースペースです。1,2Fが吹き抜けを介して広がり、あらゆる活動を受け止めます。壁による明確な区分を最小限としたおおらかなつくりとすることで、学習、芸術文化、交流、読書、子育てが交わる場所となります。東面のサッシを開放することで、軒下空間や芝生ひろばとも連続し、展示、飲食、物販と様々なイベントへ対応することができます。

■ にぎわいを発信する新たなつくり

・大ホールを開く

大ホールは劇場として最適な形状、音響空間を実現する他、収納式座席とし柔軟な使い方を可能とします。ホール側面の間仕切を開放すると「すこたまひろば」と一体化でき、さらにサッシを開放すると東西に屋内外の活動の場が広がります。

2 将来の社会動態等の変化を見込んだ施設の在り方

■ 図書がひろがるゆとりある「すこたまひろば」

・「すこたまひろば」がつくる居場所、学び、交流

「まちなか図書館」や中央公民館での図書室の取組みをより自由な空間で展開できるように、図書を中心とした学びの交流施設を提案します。「すこたまひろば」に可動できる本棚を配置することで、図書室が施設全体に溶け出すような構成とします。本を介して、居場所がつくられ、学びと交流が広がることを期待します。配架は多彩な選書に対応できる計画を現場の声を伺いながら提案・検討します。

・「あそび」を持った全体構成

「すこたまひろば」は「あそび」のある大きなホワイエ空間でもあり、将来の変化を受け止めます。「あそび」の一部である「おはなしひろば」は読書会や読み聞かせなど多世代交流のきっかけになります。

■ 「すこたまひろば」を介してつながる

・室内の様子が「すこたまひろば」へにじみ出す

専用室は 2F に配置し、壁面をガラススクリーンとすることで「すこたまひろば」に内部の様子が自然と広がります。また、静かな環境が求められる部屋は 2F 大ホール南面に集約し、静的な空間も確保します。

・室内外で連続する子育て支援センター

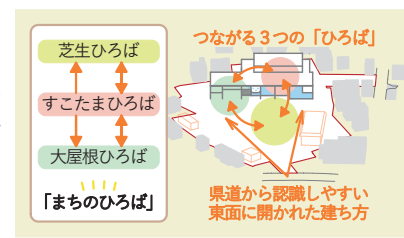
子育て支援センターは適度にオープンなつくりとし「すこたまひろば」とつながります。また、外部のあそびばや芝生ひろばと連続させることで親子が安心して遊べるふれあいの場をつくります。

■ 未来の変化に対応するためのしかけ

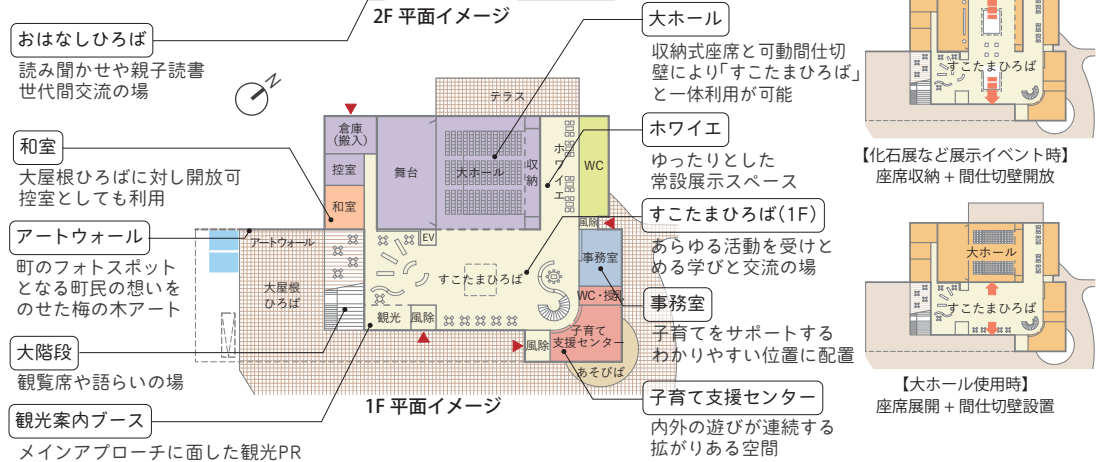
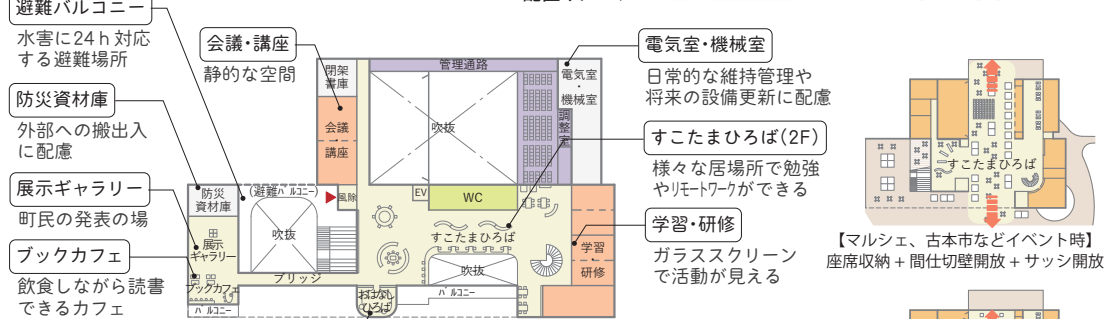
・ICT 活用を踏まえた住民サービス提供
予約や利用手続きのオンライン化に対応し、利用者の利便性だけでなく、管理運営の労力削減に努めます。

・多世代の居場所をつくる

リモートワークやオンライン会議が可能な場所と設備を整えるほか、町内の学生はもちろん、電車やバスで町外に通う高校生の勉強スポットとなる設えとします。



真室川町地域交流センター建設事業基本設計業務 簡易公募型プロポーザル提案書



3 周辺環境や自然災害を考慮した施設

周辺住宅との距離感を大切にしたい 囲まれ感のある「ひろば」

■ ゆとりを持った外周部

・周辺環境への配慮 (日影と視線、音)

法的日影 (3.5 時間) が敷地内に納まるように配置とボリュームを検討します。住環境の保全として、視界や圧迫感を考慮し、外周部にゆとりとなる植栽や駐車場を配置し、6m 以上の離隔を取ることで、周辺住宅に対して音や視線に配慮した、適切な距離感を生み出します。

■ 合理性のあるデザイン

・東面に対して大開口を開く

東面の「芝生ひろば」に対して大開口を設け、残りの三方向の開口部を絞ることで、周辺環境への配慮と熱負荷対策を同時に達成します。外皮の断熱性を高める他、遮熱材の採用、設備システムの高効率化、PPA も視野に入れた太陽光パネルの壁面設置を検討し、Nearly ZEB を目指します。

・メンテナンス、更新を考えた設備計画

電気・機械室は 2F とし、バックヤードに面して配置することで更新に備えます。PS、EPS は集約し、シャフト内には増設、更新に備えたゆとりを確保します。

■ 真室川の自然環境への配慮

・除雪の労力を減らし、雪に強い施設づくり

無落雪の陸屋根によって除雪の労力削減と落雪からの安全性を高めます。外周部のゆとりは雪押場とし、大屋根ひろば周囲に無散水降雪設備を検討します。

・2F 床レベル = 前面道路 +5m 以上

舗装勾配と 2F 床レベルを上げ水害時の安全性を確保します。大階段上部の避難バルコニーを常時開放することで、夜間の避難にも対応します。

・平時のにぎわいと災害時の安心の共存

飲み物とともに図書を楽しめるようにブックカフェを 2F に計画します。また、2F に配置することで炊出しも可能な避難場所として整備します。

4 その他独自テーマ

町の資源を活かし「学び」と快適性が共存する施設

■ 日々触れる素材にメッセージ性を込める

・町産材の木の匂いにつつまれた空間

各所の内装、軒天仕上、家具、サイン等に最大限町産材を用います。町産材を使用していることを示し、町の産業への学びと誇りを感じられる場とします。また、チップボイラー熱源の空調システムや床暖房を検討し、町の資源である木材活用を徹底します。

・持続可能性に触れる

町産材の他に、プラスチック廃材をリサイクルした板材や床材、間伐材を使ったボードなどアップサイクル材を積極的に活用し、環境問題や持続可能性への学びの接点をつくります。また、大ホールはアリーナ用床材とすることでコストを抑えつつ、軽運動等に対応した健康増進に寄与する多目的ホールとします。

■ 多様に柔軟に、多世代の交流を育む

・すべての人が安心して利用できる公共空間

バリアフリーはもとより、ジェンダーレストイレや直感的なサイン、明瞭な動線、インクルーシブな家具など多様性に配慮した設計とします。

・小さな居場所を大きな居場所で包む

多様で多世代が交流できる空間であるために、1人にもなれる小さな居場所も大事にし、誰もが訪れやすい施設とします。その上で多世代の交流をアシストする、各種催しに対応できる自由度の高い空間や本棚と座席が一体となった什器、自然と多世代が行き交う動線計画、ゾーニングとします。

・みんなで咲かせる梅の木アートウォール

「大屋根ひろば」の壁面をアートウォールと位置づけます。例えば、本の寄贈や工事への寄付を行った方、ワークショップやオープン前イベントの参加者が自分の名前が掘られた木製の梅の花を咲かせる試みを提案します。完成後も来場者が梅の花を咲かせる仕組みを継続することで、みんながどつくる交流センターの機運を継続させ愛着を感じさせる施設となります。

整理番号	※
------	---

※本欄は記入しないでください。

